

何をして遊ぶのだらう。
なきむし、なきむし。

お天道様の泣きむしやーい。
朝つばらから一日泣き通し。
ぼろぼろ涙をながしてゐる。

これらの歌謡を通してみれば何れの民族の民衆も同じ心の純真さをもつてゐる。神に通ずるのみちがある。本當に人間の價値はその美しいものをこはれない様に育てることだ。そうだ、そうだ、私は労働争議といふものをもしみみ考へさせられる。

私のいまの氣持ちでは労働争議なども、真に目覺めたるがゆゑに起つたものであるとは思はれないと同時に争議が幸福を齎すものとも思ふことが出来ないのである。紛糾してゆく大きな労働争議の解決も、もつと純真な心によつて温い家と云ふものを慎重に考慮して見る必要がありはせぬだらうが、言葉は簡であるが、この一つの家否一つの心にひき返してみることにより解決の光りを見出すことが出来るのではあるまいか。(三月六日夜記)

我等が愛する少年よ、女子よ。

高 原 社 吉 矢 み ち

十一月も半ばであつた。どんな小さな風が來ても木の葉はサラサラと鳴りながら散つていつた。頭の上には限りなく高い空が眞青に澄みきつてゐた。遠い、あるかなしかにたなびいた煙りのあたりには唯一つ、雲の塊りが白く小さくかかつてゐた。

お茶の仕度をするとき云つて家の中には入つた彼は、時間のかかるところをみると、又例の石油コンロの調子が悪くて頭をひねつてゐるに違ひない。

「何といふ暖かさだ。陽向にもち出した椅子の上で、モチヤモチヤした髪の毛を両手で頻

りに掻きむしつてゐた一人が云つた。さうして彼は指を髪の中に突き込んだまゝ下を見ながら靴の先で二三度地面を擦つた。彼の後ろには糸の様に亂れた緑の中に、残り少なくなつたが赤や白のコスモスが點々として眞晝の日光の中に眩ゆいまでに輝いてゐた。

一本の桐の下から私は身動きもせず、簡単な木製の椅子の上で身體をくの字なりに曲げてゐる彼の姿を見守つてゐた。着古した紺サージの春廣の上に鮮やかに描き出された紫の日蔭、それから無難作に足につきかけてゐる長い間手入れを怠つた破れ靴、そうしたもの